

栄西の入滅について

舘 隆 志

栄西（一一四一～一二二五）の入滅についてはこれまで二説伝えられていた。一つは、『吾妻鏡』建保三年六月五日条に、

六月小五日、癸亥。寿福寺長老葉上僧正栄西入滅、依^{（中略）}痢病也。称^{（中略）}結縁鎌倉中諸人群集。遠江守為^{（中略）}將軍家御使^{（中略）}莅^{（中略）}終焉之砌^{（中略）}（云云）。

とあることに基づくものである。いま一つは、鎌倉後期に無住道暁（一二二七～一三二二）が撰述した仏教説話集の『沙石集』巻十や、虎関師鍊（一二七八～一三四六）が撰述した僧伝の『元亨釈書』巻二など、ほとんどの史料が伝える建保三年七月五日に京都建仁寺で入滅したとする説である。

これを検証したものとしては、貞享二年（一六八五）に刊行された『新編鎌倉志』巻四「寿福寺」があり、寿福寺「開山塔」の中で、『元亨釈書』と『吾妻鏡』の記述を紹介し、さらに「京・鎌倉ノ諸寺、昔ヨリ七月五日ヲ示寂ノ日トス」という理由から『吾妻鏡』の説を正面から否定している。興味深いのは、京だけではなく鎌倉の諸寺も昔より七月五日が

入滅日であったと紹介していることであろう。『新編鎌倉志』は、延宝二年（一六七四）に徳川光圀が鎌倉を訪れた際の記録『鎌倉日記』を母体として、現地調査に基づいて編纂された。そのため、ここに京都の諸寺とあるのは、鎌倉在住の僧侶などから伝聞した情報と考えられるが、鎌倉の諸寺からの情報は、現地の調査結果である。『新編鎌倉志』が刊行された頃は、当の鎌倉においても『吾妻鏡』の説は肯定し難いものであったらしい。また、あくまで「示寂ノ日」を問題視しており、『新編鎌倉志』では、『吾妻鏡』の記事を参照しつつも、入滅地を鎌倉とは解釈していなかったと考えられる。

栄西が開山した京都東山の建仁寺では、『吾妻鏡』が刊行された江戸初期には、栄西の入滅日を七月五日、入滅地を建仁寺としていたとみられる。大宋宝慶元年（一二三五）八月九日に修職郎監臨安府都税務の虞^{ぐちよ}樗^しが撰した『日本国千光法師祠堂記』、元亨二年（一二三二）に成立した『元亨釈書』、中巖円月（一二三〇～一二三五）の語録『中巖和尚語録』巻下

「拈香」に収録される康安二年（一三六二）の「千光祖師忌」、龍山徳見（一二八四～一三五八）の語録で法嗣の無等以倫の編であり康暦二年（一三八〇）の序を有する『黄龍十世録』収録の栄西伝、応永十一年（一四〇四）に明の僧侶である如蘭によって記された「洛城東山建仁禅寺開山始祖明菴西公禅師塔銘」、月舟寿桂（一四六〇～一五三三）の語録『月舟和尚語録』に収録される永正十一年（一五一四）の「開山祖師三百年諱香語」は、それぞれ入滅日を七月五日としている。

文政十二年（一八二九）に植田孟緒^{うんだ もうしん}によって撰述された鎌倉の地誌『鎌倉攬勝考』は、『吾妻鏡』を紹介しつつ、「七月五日を示寂の日とすることは、京・鎌倉ともに釈書によれるにや」とある。しかし、天保十二年（一八四一）成立の『新編相模国風土記稿』巻八十九「寿福寺」では「三年六月五日栄西当寺にて寂す」とあり、寿福寺で栄西が入滅したと記されている。そのため、江戸末期には、『吾妻鏡』の記述に基づき、栄西の入滅地を鎌倉とする解釈が存したことになる。

その後、明治期には、鷲尾順敬の『禅宗史要』（鴻盟社、一九〇二）や『日本仏家人名辞典』（光融館、一九〇三）、孤峰智叡の『日本禅宗史要』（貝葉書院、一九〇八）、『国史大辞典』（吉川弘文館、一九〇八）などで、栄西入滅地を鎌倉とする説が挙げられている。栄西の伝記を扱った著書でも、木宮泰彦『栄西禅師』（丙午出版社、一九一六）、伊藤古鑑『栄西』（雄山閣、

一九四三）において、他に辻善之助『日本仏教史』第三卷（岩波書店、一九四九）で入滅地を鎌倉と判断している。また、『鎌倉市史』社寺編（吉川弘文館、一九五九）では、鷲尾順敬・伊藤古鑑・辻善之助などの研究に基づくことを明記して、栄西の寿福寺入滅を支持した。その後、栄西研究の基本書の一つとなる多賀宗集『人物叢書』栄西（吉川弘文館、一九六五）で、入滅地として京都と鎌倉の二説を並記し、以後それが定着していった。重要なのは、いずれの説にしても『吾妻鏡』の記述を基に鎌倉にて入滅したと解釈していることである。

果たして『吾妻鏡』建保三年六月五日条の記事は、栄西が鎌倉寿福寺で入滅したことを示す記事と言えるのだろうか。『吾妻鏡』には「入滅」と表記されて死没した僧侶の記事が二十五名分確認される。このうち、京都で入滅した僧侶については、飛脚・使者・伝聞などの記事が存する場合があり、実際の入滅よりやや遅れて記事になっている。道法、公胤、貞暁、親巖、信恵がそれに当たる。しかし、傍証史料で京都での入滅を伝える記事があるにも拘わらず、入滅日に記事が収録されている場合がある。栄西、定豪、定親である。

定豪・定親の例が存することを踏まえるならば、『吾妻鏡』に記された栄西の入滅記事からのみでは、栄西の入滅地が鎌倉であったと断定することはできない。同記事はその時代に起こった一般的な事実が記されている可能性があり、『吾妻

栄西の入滅について（館）

『鏡』の栄西入滅記事には、入滅地について明記されていない、というのが最も妥当な解釈と思われる。『吾妻鏡』の栄西入滅記事が、鎌倉入滅を伝えるものと言えない以上、入滅地は京都というのが記録に残る唯一の説であり異説はない。そのため、栄西入滅をめぐる問題は、入滅地の確定に移る。

この栄西の入滅日について、決定的とも言える史料が出現した。それが、『一誠堂古書目録』平成十二年秋号に掲載された『大乘院具注暦日記』である。『大乘院具注暦日記』に「七月五日の臨済宗祖栄西の入滅を伝える裏書」が存することが判明記されており、栄西の入滅日が七月五日であったことが判明した。しかしながら、平成二十一年現在、一誠堂書店に所蔵されている『大乘院具注暦日記』は、公開されていない史料であり、栄西の入滅について実際にどのような記事が記されているのか公にはされていない。筆者は、一誠堂書店の御許可を頂いて栄西入滅に関する記事を紹介するものである。

まず、『大乘院具注暦日記』について、簡略に説明してみたい。『大乘院具注暦日記』とは、南都興福寺の大乗院の門跡や、それに準ずる僧侶が記した具注暦日記の総称である。一誠堂書店が所蔵するのは、この内の一点であり、建保三年の具注暦日記である。もともとは興福寺大乗院に伝来したものであるが、『大乘院具注暦日記』は大乗院から流出し、数奇な経緯を辿り、各地に所蔵されるに至っている。この経緯

については、河野昭昌氏⁽¹⁾が詳しく考察しているので、これを参考にして、触れておきたい（以下、『大乘院具注暦日記』を総称する場合は『暦記』、一誠堂書店が所蔵する『大乘院具注暦日記』の建保三年の記録を指す場合は『建保三年暦記』と称す）。

宝暦元年（一七五二）、興福寺大乗院家諸大夫の杉田喜昌が大乗院伝来の文書・記録等の目録を作っている。この目録には『暦記』の記述もあり、その中に「建保三年 一卷」、その右にやや小さな文字で「後菩提山殿実一御記」とあるのが、一誠堂書店が所蔵する『建保三年暦記』とみられる。宝暦元年の時点では、興福寺大乗院に所蔵されていたのである。

明治二十一年（一八八八）八月十日に、国学者の小杉樞^{こすぎすむら}（一八三五～一九一〇）が、南都の寺社を調査した際の記録には、「建保三年暦日記」が興福寺に所蔵されていたことを記している。これが、『建保三年暦記』と考えられる。しかし翌十一日の調査では、松園尚嘉^{まつぞのひさよし}（一八四〇～一九〇三）が所蔵している史料として、『建保三年暦記』以外の『暦記』の存在を記している。明治二十一年の時点、『建保三年暦記』は他の『暦記』とは別に興福寺に所蔵されていたのである。

その後、大乗院の文書は流出し、その大部分が、内閣文庫、興福寺、徳富蘇峰（一八六三～一九五七）成實堂文庫の三箇所に分蔵された。『暦記』はこれらの文書とは別に流出し、京都大学付属図書館、東京国立博物館、大東急記念文庫などに

収蔵された。しかし、この中にも『建保三年暦記』は含まれておらず、のちに一誠堂書店が所蔵することになった。

日記の記主については、『一誠堂古書目録』平成十二年秋号では信円（一一五三～一二三四）と推定しているが、江戸時代の目録では実尊（一一八〇～一二三六）とされている。実尊は師である信円から大乘院を付属されているという関係にある。ただし、『建保三年暦記』は詳細な調査が行なわれていないため、記主の確定については今後の研究に委ねたい。

今回調査した『建保三年暦記』七月五日条の裏書には、

栄西前権僧正葉上房入滅了、臨終正念、云々、七十五才、

という記事が収録されている。「云々」とあるから、栄西が入滅し臨終正念したことを伝聞した記事である。そのため、興福寺大乘院にまで栄西入滅の情報が伝わったことが知られる。入滅した際の年齢については、「七十五才」とあり、これは『元亨釈書』を始めとする諸史料と一致した情報である。

『建保三年暦記』の栄西入滅記事の内容が、『吾妻鏡』と相違する点を上げてみたい。一つ目は、『吾妻鏡』が六月五日条に記されているのに対し、『建保三年暦記』では七月五日の記事とされていることである。これは、『吾妻鏡』以外のほぼすべての史料が七月五日であることと一致している。『建保三年暦記』に七月五日とある以上、入滅日については確定してよいだろう。二つ目は、『吾妻鏡』では「葉上僧正栄西」

とあるのに対し、『建保三年暦記』では「前権僧正栄西葉上房」と表記されていることである。栄西は、入滅する前にすでに権僧正の職を解かれ、前権僧正となっている可能性が高い。この点は、従来どの史料にも見られない新しい情報と言える。三つ目は、『吾妻鏡』では「痢病」とあり、栄西が激しい病で入滅したとあるが、『建保三年暦記』では、「臨終正念」という最期を伝えている。「臨終正念」とは煩惱が消滅し迷いなく入滅した様を指す。栄西が入滅した理由は『吾妻鏡』にしか記されていないため明確ではないが、少なくとも「臨終正念」という最期が興福寺に伝聞していたことが判明する。

『建保三年暦記』によって、栄西の入滅日は七月五日であったことが確定し、その結果、栄西は最晩年である建保三年に京都で過ごしていた可能性が高くなった。このことは、栄西の晩年に参学したという伝記が残されている道元（一二〇〇～一二五三）の足跡を考察する上で重要である。これまで『吾妻鏡』の記事から栄西入滅地を寿福寺と解釈した上で、道元と栄西の相見否定説の考察が進められていたため、この点を踏まえた上で再考察する必要性が生じたのである。

栄西の入滅日が六月五日ではなく、七月五日と確定したことは、道元のみならず他の禅僧たちの伝記を考察する上で極めて重要な示唆を与える。禅僧の語録には、栄西の忌日に行なった上堂が記録されている場合が存する。語録の上堂は多

栄西の入滅について（館）

くの場合、上堂が行なわれた順に配列されているために、栄西忌が行なわれた日が七月五日であると確定したことによって、語録に記録されている栄西忌の記述を通して禅僧の活動の一端が判明するからである。その例を挙げてみたい。

まず、栄西に直接参じていた可能性が存する道元の語録には、栄西忌に行なわれた上堂が幾つか記録されている。『道元和尚広録』の栄西忌の上堂はその上堂配列から、おそらくは七月五日に行なわれていたと推定されていた（伊藤秀憲『永平広録』説年代考）『駒澤大学佛教学部論集』十一号）。そのため『建保三年暦記』の栄西入滅記事は、この考察を裏付けるものと言えるだろう。

また、『蘭溪和尚語録』にも、蘭溪道隆（一二二三～一二七八）の京都建仁寺における「開山千光和尚忌上堂」が収められている。筆者の考察の結果、『蘭溪和尚語録』は上堂順に配列されていることが判明しており（拙稿『大覚禅師語録』の上堂年時考）『駒澤史学』第六十六号）、蘭溪道隆が建仁寺で行なった『蘭溪和尚語録』の「開山千光和尚忌上堂」は、弘長二年（一二六二）七月五日になされたものと確定する。

『元庵和尚語録』には、元庵普寧（一一九八～一二七六）が来朝した際のことが、「無錫南禅寺語録」と「建長禅寺語録」の間に記録されており、元庵普寧が渡来して間もなく博多の聖福寺を訪れて滞在していた時、「開山千光法師忌辰」が行

なわれ、元庵普寧が請われて聖福寺にて陞座説法を行なったと記されている。その日時が、文応元年七月五日であり、元庵普寧の来日が七月五日以前であったことも確定する。

『建保三年暦記』によって栄西入滅日が七月五日と確定し、鎌倉期を代表する禅僧の行動の一端が確定することとなった。これは、当時の記録が少ない禅僧の伝記を考察する上で貴重な成果となろう。栄西入滅日の確定を通し、今後も禅宗史において多くの点が解明されていくと考える（詳註略）。

〔付記〕『大乘院具注暦日記』に栄西入滅の記事が存することは、駒沢女子大学教授の菅原昭英先生と元神奈川県立金沢文庫長の高橋秀栄先生からご教授を頂いた。平成二十一年四月二十四日、一誠堂書店のご厚意により、『大乘院具注暦日記』の閲覧を行なった。調査は、高橋秀栄、林譲、西山美香、佐藤秀孝、館隆志で行ない、諸先生方から多くのご教授を頂いた。記して感謝申し上げます。

- 1 河野昭昌「大乘院旧蔵具注暦」の目録と伝来の軌跡」（『堯榮文庫研究紀要』七号、二〇〇七）・「翻刻と研究『承元四年信円記』」（『堯榮文庫研究紀要』六号、二〇〇五）。

（キーワード）『大乘院具注暦日記』、栄西、道元、道隆、普寧（駒澤大学禅研究所研修員）